

物を書くということ (94・4・18)

古 山 高麗雄 (昭17・9・文丙)

私は元来大変話が拙いので、拙い話をさせて頂きます。今紹介して頂いたんですが、私は三高に昭和十五年に入りまして、今日はクラスメートが随分沢山来ておりますけど、私は十六年だったかな、中途退学いたしました。その時の経緯を少し補足させて頂きます。

私、二年浪人して三高へ入りました。あまり勉強出来る方じゃないんですけど、北朝鮮の新義州という所で生まれまして、旧制中学を卒業するまでそこに居りました。それから二年浪人して、はじめ親父が医者なものですから理科に行くつもりで、仙台の第二高等学校を受けたんですけども、通らなかつた。第一次試験は通るんですけど、第二次試験というのはどうしても通らなかつた。そのうち、文科に行きたくなり文科なら京都が一番だと思って三高を受けたら、今度は幸いにボンと入れました。入れたのはいいのですが、私は一種の反戦学生だったですね。ただし、反戦運動をするような反戦学生ではない、ひとりで、いかに、違つと自分の考えの中で反発してい

るだけ、とてもいいですか、そういう学生でした。しかし、そういう人間ですから、なにかのときにひよいと、その自分が出てしまいます。先ほどクラスメートから、私が倫理の時間に森校長に借問した話が出たけども、あれは私は、一種の甘えだったと思います。三高を信頼しているから、つい気を許したのです。大東亜共栄圏なんていうような事が云われていた時代です。ほかではあんなことは言えません。あのとき、森校長は、日本は東洋の長男で、中国は次男で、長男は次男の間違っていることを直してやらなければいけないというような話をして、私はそれに反発したんです。

「それは誰が決めたんですか、日本人ですか。それじゃあ、中国人は中国人で、中国は東洋の長男とも言えますね」と私は言ったんです。覚えていらっしゃる方もあるかも知れません。あるいは忘れた方もいらっしゃるかも知れませんが、私はそう言った。すると校長は、今日は授業をこれで止めるとおっしゃったんですね。そして、古山君、後で僕の所へ話に来いよと、家に来いよと言われまして、その時私は愕然としました。ああ、三高みたいな素晴らしい学校の校長でも、こういう建前を言わなきゃならないのだ。生徒を沢山前にしては本音を語れないのだ。その校長先生の気持も立場も考えずに私はかみついたんだ。しかし、これが日本の教育であるとしたら、教育とは何だろうかと考えました。二十才位の年齢というのは、理想と現実が一緒にならないと気持が済まない、それは一種の純真性というか、若さといえますか、そういうものなのでしょう

が、そういう年ごろなんですね。

三高というのは、いわゆるエリートコースです、事実、大変優れた方が多く、卒業した方々はこの国のリーダーになつてゐる。つまり私は、日中戦争に反対しながら、この国のエリートコースを歩んでいる。こりや矛盾していると思ひはじめたのです。底の浅い正義感だったかもしれないが、そんな考えの中で、私はバランスを失ひまして、とどのつまり、放蕩し、自滅したんですね。

三高では中寮の三番に入りました。こちらの太田君と一緒にしました。ですから、その当時の私が、五十年前の私がどんな人間であつたか、太田君はすぐ傍で見えていました。一学期で寮を出しまして北白川に下宿しました。それから学校は、一応フランス語の授業には出しましたが、ろくに登校しないようになって、宮川町だとか、祇乙だとかへ通ひ詰めまして、そして一学期がビリになりました。二学期はビリから二番のブービーを取りまして、三学期がまたビリになりました。成績劣等、出席日数不足、開校以来のダメ三高生ということだったようです。私のような者は放校になるだろうと言われまして、これも若者の虚栄のようなものでしょう。放校になる位なら、退学届を出して、止めちゃえということにして、ちよつと残念だったんですがね、あんないい学校ないからと残念だったんですが、どうせ放校になるんだつたらしょうがないと思つて、退学届を教務課へ行って出しました。

それから東京へ戻つて来まして戦後の言葉で言えば、ヒッピーみたいな生活を一年半位をやりました。親からも勘当されまして、そのうち結局、軍隊へ引つ張られました。南方を、方々あちこちを万年陸軍一等兵で行つてまいりました。三高時代も軍隊へ行つてゐる間も、私が考えたことは、ま、いろいろと忘れたことも多いんだけど、人が生きるということはどういうことか、ということだつたと思います。そして、自分にとつてそれは、自分をいかに表現するかということしかないんじゃないか、どんな状況におかれても、自分をいかに表現するかということが、人間の生きるということではないか、そういう考えの方向で気持をまとめたような気がします。大體生き物というのは、生きる根本というのは、食うことと子孫を残すことです。他の動物の表現というのは、食うことと求愛と、ほかにも危険の伝達とか、そういう表現はありますが、食うこととセックスに限定されていると言つてもいいぐらいです。だが人間の場合は、もちろんもつと巾が広いわけです。人にとつて、パンもセックスも大事ではありますが、人はパンとセックスのみに生きるに非ずということですね。そこに物を書く世界があります。

食うことはもちろん大事だけれど、たとえば、自由とは何か、ということも考えてみなければなりません。三高のモットーは「自由」ですけど、自由というのは何か、戦争中は、自由とは、自分の思うことだけにしかない時代だと思つていました。思うことだけはいつの世にも自由です。何を思おうと自由です。いや、今もあるいはそうなのかもしれません。自由ということについて

いろいろな切り口で語ることができますが、考え方もまたいろいろ、それでいいんですが、たとえば私たちは、自由とは何かを考えてみなければなりません。差別語の問題なんかが週刊誌や何かで取り上げられていますけれど、心の中で差別することはいわば自由なんです。行動に表わすことだけは社会生活上具合が悪いんです。今も思う自由しかないのかもしれない。しかし、戦争中はひどかったですなあ。まったく思う自由しかなかった。しかも死ぬだろうと思っていました。

陸軍一等兵で、北ビルマから中国の雲南省へ送られて、戦場を体験しました。ここで死ぬのかなと思いましたが、ところが死なないんですね。悪運が強いんでしょうか、しかし、反戦でぐれて、三高という素晴らしい学校を中途退学した私が、何のめぐり合わせか、戦犯容疑者ということで、サイゴンの監獄へ一年放り込まれて裁判を受けました。世の中とは理屈通り行かないものだと教えられました。帰って来た時には何もありませんね、私には。学歴ナシ、技術ナシ、学問ナシ、親ナシ、金ナシ、です。しかし、生きて帰って来ただけ幸運で、それから長い間編集者をやりました。人間というのは、表現する動物だという考えは、今でも変わりませんが、表現というのは、何も文章を書いたり、絵を描いたり、音楽を作ったりということだけではなくて、仕事の上でも表現する。色々な面で、刻一刻と表現しながら生きていくわけですから、私は編集は何も出来ないんだけれども、三高文丙ですから、文学に関係ある仕事ならひよっとしたらやれるかなあという気持ちで、編集者になりました。

編集者という仕事は、やってみると大変面白いですね。編集者は黒子みたいな存在であるけれども、ある時は演出家みたいな立場にも立つし、これはなかなか面白い仕事で、私は優秀な編集者ではなかったんですが、こういう面白いことがやれるならまあいいやと思って、実は小説なんか書く気持は無かったです。表現欲がけっこう満ざっていたんですね。

三高の時には私は、芝居の脚本を書きたかったけど、あの当時は脚本を上演するには、内務省、文部省、警視庁の検閲を三つ通らないと出来なかった。そんなものを私の書くものが通るわけないんで、もう脚本家は諦めました。小説ならいいかと言えば、小説も同じことです。とにかく、才能の問題もあります。私には文章で食う道は閉ざされていました。私は諦めの連続みたいな人生を送っていました。その私が戦地から帰って来て編集者をやったのですが、これだけ面白い仕事が出来るとしたらこれ位でいいんじゃないかなあと思っておりました。ただし、どうも三高を途中で止めるような人間ですから、会社じゃあ全々ダメなんです。サラリーマンとしてね。今みたいな組合が発達していない時代ですから、私は、入社させてもらっても、後の人にどんどん抜かれていくんですね。階級も抜かれる、ボーナスは他の人にはプラスアルファが入るが、私には入らない。そういう状態をだいぶ長くやりましたよ。それでもこれでいいやというような気持でやってきました。ところが、文芸批評家の江藤淳が、古山さんも小説書け、小説書けって言う。しかし、書かなかった。ところが、自分で作っていた雑誌に原稿が取れませ

んで、ポカッと穴が開いたんです。それでその穴埋めのために、一週間ばかり会社に泊まり込んで、五十枚ばかりの短編を一つ書いてみたんです。

それを江藤淳に読んでもらって、私が編集している雑誌にのせても名折れにならないかどうかという判定を願ったんですね。ところが、大丈夫だというんで、それを載せたのが私の作家生活の始まりなんです。つまりお手盛でデビューしたわけです。ところが、それを載せましたら、文芸雑誌から注文が来ました。サイゴンの監獄を舞台にした二つ目の作品が、芥川賞をもらいました。まったく、何がよくなるか、何が悪くなるか分からんものだなあと思います。

まあ、そういう経緯で小説が職業になってしまったのが今の私ですが、別に職業でなくても人は物を書きます。そこに人の営みというものがあるわけで、私はプラスそれで食っているということになりますか。まあそういうことでしょうね。もちろん、職業として物を書くということには、それに伴う自分の空間、世界があります。

若い時書き始めの頃というのは、限りある海の力試さんという気持ちになったりね、ひよっとしたら、自分には、今書いているものより他にも才能があるんじゃないかなろうかと、夢想してやってみて、すぐ自分の限界というのが見えて来たり、そういう思いの振幅は、職業作家であるための大きさもあるかと思われます。「物を書くということ」は先ほども言いましたように、立場により、目的により、その他により、もちろん、いろいろです。広告のコピー、公文書、手紙、そ

れから小説、戯曲いろいろあります。今日来られている中江君はすばらしいバレーの脚本を書いておられますが、中江君は職業として原稿料が欲しくて書いたものではないです。中江君の「物を書くということ」には、中江君独特の空間があり必然があるのです。私の場合は、先ず原稿料をくれなきゃあ書かないですね。もちろん、義理で書く場合もあります。たまには原稿料に関係なく何か書くということもありません。

けれども今は、私は職業として物を書くということについて話しましょう。小説、日本の文壇というものに限定して話すと、日本にはエンターテインメントの文学というのと、純文学というふうに分けられている。外国はそんなことはない。いい小説と悪い小説というのがあるだけと言っているようです。日本だけは純文学とエンターテインメント、エンターテインメントは又いろいろピカレス文学だの、推理小説だの、ポルノだのいろいろ分かりますけど、いかにも日本らしいと思いますね、純文学などという考え方、純と付けるところがね。私は芥川賞ですから分類すれば純文学になるのでしょいか、私が純だったら、エンターテインメントの人は不純ということになる(笑) そんなことないですよ。ただね、違うのはね、最低限喰わなきゃあなりませんけども、私の方はテーマを追求するという仕事です。それで本が売れたということは大して嬉しくないんです。芸術性だとか、人間性と評価された時に嬉しいんですね。ところが、エンターテインメントの方は、そういう部分もありますけれど、商品価値を高めていかなきゃあならない。どっちが上、

どっちが下ということないわけです。ただ私にエンターテインメントの小説を書けと言われてもうまく書けないです。

しかし、一時ひよつとしたら、俺も面白い時代小説書けるかも、ポルノも書けるかなあと思っ
て書いてみました。いくつか書いてみました。いくつか書いてみましたけど、商品価値は低いよ
うです。それでは私の書くものは芸術性があるかと言えば、どうですかね。ただ何ていうんでき
かね、純文学なんて純なんて付けなくてもいいんですけど、私のやっている仕事をいうのは大体
ああいうことが仕事になるのがおかしいんですが、さっきは自由ということについて、ちよつと
言いましたが、ほかにも、美とは何か、人生とは何か、人間とは何か、醜さとは何か、虚偽とは
何か、虚無とは何か、そんなことばかり考えて毎日暮しているわけですね。それは人の為を考え
ているんじゃないかって、自分がそういうことを考えたいから考えているだけで、それが商品価値を
持つというのは、一種のおかしな現象だと思っんです。純文学作家というのは貧乏でいいんです
ところが幸い金持ちではないんですが、そう貧乏でもなく、何となく皆さんよりは貧乏ですけど
ね、何となくつき合っで行けるようなことで、非常に有難いと思っっています。

こんな調子で、私も七十四才になりまして、いつの間にかこんな調子でやっていく他、しよ
うがないでしょうね。そのうち死にますけど。私は三高というのは本当に好きです。その好きな理
由というのが沢山ありますけどね。クラスメート、クラス会に鈴木ホルタンに引っぱり出されて、

クラス会に出るようになりました。ドロップアウトした人間だから皆んなの仲間に入れてもらえないんじゃないかなあと思つたら、彼が引っぱり出してくれました。クラスメートと話をしますと優秀ですよ。みんな。お世辞でもなく、私なんか及びもつかないものを皆さんは持つておられる。だから私は、自戒の言葉としては、いい気になるな、うぬぼれるな、というようなことでしょうかね。うぬぼれるべきもの、誇れるものは何も私にはありません。小説なんていうのはね、武田鱗太郎という作家が云つておりますが、誤解のクモの巣の上に、ちよんとのつているようなものだ。誤解されたつて、怒つたつてしょうがないんです。

ジュール・ルナルはね、才能というのは、気の利いたことを言うことではないと言っているんです。沢山描くことだと言っています。そうすると、私は才能がないことになりそうですけどね。ないものはしょうがないじゃあないかと開き直りがあります。恐らくルナルは、自分が沢山描けないものだから、自戒の言葉として言つたのではないかな。「物を書くということは」私にとつては、ですから、つまりは「変な職業」「私には大事な変な職業」ということにでもなりますか。まあこんなことを言つても、物の部分の話にしかならないでしょうが、だとしてもこれぐらいで終わらせてもらいます。

とりとめのない話で雑談的な話しか出来ませんでした、これでご勘弁願います。

(作家)